
ヴォルニカ物語

ぶらむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴォル二力物語

【Zコード】

Z6765U

【作者名】

ぱらむ

【あらすじ】

とある村に住む少年、ミリファー。
ミリファーには母がない。

「母に会いたい……」

そしてミリファーは旅に出る。

自分の母を探す旅へと……

HPLRAGE

ぼくはミコフラー。片手にはさびた剣。もう片手には古い木のたて。
ぼくの横には小さな子犬。

ぼくが住んでる村の広場で、ぼくは剣をふるつていた。さびて、使
い物にならぬような剣をひたすらふるつ。

けんかをしている訳じゃない。いわゆる、お遊びつてやつだ。
え？なぜ母親は止めないのかつて？ぼくには母親がいないからさ。

お父さんはいるけどね。

いや、会つたことが無いだけで、本当はいるのかもしない。
お母さんのことをお父さんにいつたら、とても苦い顔をしていた。
言いたくないのか、思い出せないのか、幼いぼくには良く分からな
い。

ぼくの家族はお父さん、3歳年上の姉がいる。
言いだしたら止まらないようなお母さんの話はここまでにして、話
を進めよう。

さつきもいつたぼくの横にいる小さな子犬はぼくの飼つているトム
ところ。

昔、雨のなかに捨てられていたトムをぼくが拾つたのだ。
ちいさい体の所々にぶつんと黒い斑点模様がトムにはある。
どの犬にも当てはまらないから、トムは雑種なのかもしれない。
ぼくは、そんなことを考えながら剣を振り続けていた。

剣をふるつことを今すぐやめれば、ぼくは、この道を歩かなくて済
んだだらうか。

この、悲しく、空しい道を。

ぼくは、今悔やむ。

この道を、この運命に逆らう力が無かつたことを。

始まりの話

ぼくが持つた疑問。

この道を歩くぼくは、他人から見てどのように見えているのだろう。

今は夜だ。

ぼくは布団にもぐりこんでいる。じはんはまだ食べていない。

お父さんは、ぼくのとなりに座っている。お腹はすいていないのかな…。

姉さんがキッチンでなにかをやっている。

いいにおいがしてきた。

ああ…、我慢の限界だ。

ぐつぐつぐつ…

ぼくのお腹が大きな音をたててなつた。
それと同時にテーブルの横にお皿が置かれた。
置いたのは、ぼくの姉さん、ラスターだ。
姿は普通より上ぐらいいの美人さんだ。
ラスターはにっこり笑つて言つた。

「あついうちに、早く食べちゃいなさい。」

「うん」

お父さんも、笑つた。

「すまんな、ラスター。」

「いいえ、クロロア父さん」

こんな感じで夕食の時間は過ぎて行つた。

寝る時間だ。

「おやすみ、ラスター。」

「おやすみ」

しかし、おやすみと言つたものの、なかなか寝付けない。もぞもぞしていると、

「どうした? ミリファー」

と、お父さんが話しかけてきた。

なかなか寝付けないと言つと、

「では、私がお話を聞かせてあげよう。」

お父さんの話はこうだつた。

昔、ある国に美しい姫が生まれた。

姫は、大切に、大切に育てられた。

姫は大きくなり、婚約者もでき、充実した毎日を送つていた。

しかし、姫を欲しがる別の王子が、姫を連れ去つてしまつた。

姫は城に閉じ込められ、泣いていた。

そして、星に願いをかけた。

元の城に戻りたいと、婚約者に会いたいと。その願いに、星が答えた。

星は姫を救つて、王子に罰を『えた。

そして、姫は元の城に戻り、婚約者にあうことが出来た。

姫は、自分を救つてくれた星をこう呼んだ。

ヴォル一カ《聖なる星》と…。

ぼくはポツリとつぶやいた

「ヴォル一カ…」

なんとなく…懐かしさを感じる。聞き覚えがあるという感覚が生まれた。

なぜだろうか。

お父さんはそんなぼくを見て、微笑んだ。

「さあ、寝なさい。明日、起きれなくなつてしまつぞ」

なぜなのか、そんなことを考えていたら、寝付けなかつたことなど忘れてしまつたように眠れた。

街に

ヴォル一カ『聖なる星』

目が覚めた。

「やあ、起きた！ 今日は街に出かけるんだって、父さんが昨日話してたじゃない！」

ぼくは、その言葉を聞いて、時計を見た。
9時00分ジャスト。

今日は、家族揃つて街まで行く日。

時田寝つきなかつたのほいのイベンアがつたからだつたのだ。
ほくね、この日をずっと楽しみにしてた。

魔法のように早く用意が終わつた。

お父さんが言った。

街だ。

ぼくとワスターは田を見張る。

当然だ。ぼくらは村から出たことが無いのだから。だからこそ、ぼくはこの日を楽しみにしてたのだ。ぼくとラスターが握りしめているのはお金だ。

この国のお金の数え方は、「円」でも「ドル」でも「セント」でも

ない。

「オリア」だ。

ぼくの手の中には、1万オリア。ラスターの手の中には、1万5千円

オリアだ。

「楽しみね」

「うん」

お父さんが言った。

「私は向こうに行く。お前たちは田舎に行け。では、6時に待ち合
わせだ。」

「はあ～い」

「ではな。」

お父さんと別れて、ぼくらは防具屋に行つた。

「わあ……」

ぼくらは田舎を輝かせた。

鎧や兜。それそれに埋め込まれている宝石がとても綺麗でたまらなかつた。

ずっとそれを見ていると、店主のおじさんは、

「ハハハ。あまりもんでいいならやひつか?」

「いいの!~?」

「ああ。あ、待てな……」

そう言つとおじさんは奥で「ゴンゴン」やつ始め、じぱりくあると…

「ホレ。持つてけ。大事にしてくれよ。」

と言つて、ぼくらに宝石を渡してくれた。

ぼくには深紅のルビー。ラスターには蒼く輝くクリスタルだった。
しかし、ラスターだけ、ネックレスにしてある。
ぼくは少し不機嫌になつた。

その様子を察知したおじさんは、

「ああ、ぼくやにはこれだ。」

そうしておじさんが取り出したのは、

「これ…剣!」

「ああ、剣だ。鞄もあるね。」

ぼくは、ついにすることに気がついた。

「ん？ 持つ所に、穴がある…」

ぼくがそういふとおじさんはひょいとルビーを取って、持つ所にはめた。

キイイン…

不思議な音をたて、剣が光り輝いていた。

「もつてけ！」

「お金は…」

「いらっしゃよ。初めて来たんだろ？ その記念だ。」

そしておじさんは笑つておくに引っ込んでつた。

「あっ、ありがとうございます…！」

そしてぼくはおじさんからもらつた剣を、鞄にしまつた。

「ん？」

ラスターが言つた。

「なに？」

「もう6時よ…」

「待ち合せ場所に行かなきゃ…」

「遅いぞ」

お父さんが待つていた。でも怒つてないみたいだ。

「めんなさい」

「まいい。村に帰るわ」

「はあーい」

家に帰つてきたころはもう夜だった。
お風呂からあがつてきたら、お父さんとラスターの話し声が聞こえた。
なんとなく隠れて聞いてみた。

「ふう……」

「どうしたんです？父さん」

「いや……少し考え方があつてな」

「なんですか？考え方って」

「ヴォルーの話のことだ。お前にも昔話したわ」

「ああ……母さんがいたころですね」

「……」

ぼくは驚いた。

ラスターが小さい頃、母さんはここにいたんだ……

「あれはな、妻……お前の母のパリに聞いた話をもとに作ったんだ。

「……！」

「やつだつたの……！」

ラスターも驚いてるみたいだ。

(お母さんに……会いたい)

ぼくは、初めてそう思った。

この家を捨てても。

そして、ぼくはある決心をした。

夜明けがきたらここを出る……

そしてお母さんを探すんだ……！

森の図

夜明け。

ぼくの、新しい時間の始まり。

片手には新品の剣。

もう片手には、新しく作った木の盾。

ぼくの横には子犬のトム。ぼくの相棒となる犬だ。
よし、旅の準備は完璧だ。

ぼくは地図を広げた。

この村のすぐよこに『聖光の森』セイコウノモリがある。

まずはそこに行こうかな…。

「ミツファー」

聞き覚えのある声がした。
ふりかえると…

「ラスター！」

あちゃー。黙つて行こうと思つたのに。

「私たちは姉弟よ。あなたの考えてることなんかお見通しなの。」

しばらく沈黙が続き、

「元気でいなよ。姉がこれだけたのんでもるんだから言ひこと聞きな
れい」

「え…」

「一回田は言わないわよーじゃあ、行ってらっしゃい」

そう言つてラスターは、家の中に入つて出てこなかつた。
「…行つてきます」

しづら歩いたのに、まだなのか…

少し疲れてきた。

もつと歩く。

なにかが見えた。

「森…だ！」

走つて中へ入る。

入口に張り紙が張つてあった。

『魔物が頻繁に出てきますのでお引き取りください』

ぼくは無視する。

するとわっしゃく…

「ピイー！」

上から鳥の鳴き声が聞こえた。

鳥が降りてきた。だけどぼくは見抜いていた。これは魔物だ。
ばしゅう！

剣を振る。ヒットした。

小さくガツツポーズ。

どんじん落ちてくる。

むちやくちやに振るつても必ずヒットする。

ぼくは本で読んだことがあった。

魔物が発する黒い液はあらゆるものを溶かす力があるらしい。
だから、ぼくはそれに注意しながら戦つた。
でも全然かけてこない。

すこしほぐが浮かれたとき…

「わゅ~いわきいかれえ」おおがじいじゅわわやわおああ……！

意味がわからない奇声を発しながら黒い液が向かつてきました。

「ぐつ~う~」

かろうじて避けられたが剣のわきつぽが溶けた！これじゃあなにも
切れないと…！

再び黒い液が顔めがけて…

ズドン！

ぼくは無事だつた。でも、わたくしのズドンといつ音はないに？

「無事だつたか？」

綺麗な声。でも君は…

「私は森の民。リア＝クアだ。」

いきなりぼくを救つてくれた少女。リア＝クア。

正体はまだ、わからない。

リア＝クア

「リア＝クア…？森の民？」
やつとのことで出てきた言葉。

たけど、リア＝クアは無視し、あたりを見回す。

そして、いきなりぼくの手を掴み、風のように走り出した。

「うわあッ…！」

力がすごくて強い。

しばらくすると、広い場所に着いた。中心に大きな大きな木がある。
木の木陰にぼくを置くと、座り込んだ。疲れているのかな？

ちかくで見ると、驚いた。

すごく綺麗だったからだ。

そこいらの人とはケタはずれだ。

自己紹介をして…

遠慮しながら聞いてみた。

「あのう…リア＝クアさん。森の民ってなんですか？」

「タメ口でいい、リアでいい。森の民も知らんのか？無知なやつだ」
口調は厳しいけど、声も綺麗だ。

ぼくは頷いた。

リアは溜息をついて言った。

「いいか？森の民とはな…」

そうしてリアの話が始まった。

昔、世界は汚れきった人間で埋め尽くされていた。

盗み、人さらい、違法薬物乱用、殺害などをする人間で。

森の民はそれを見ていられなくなり、いつからか罪を犯した者ども
を裁くようになった。

すると、どんどんと罪を犯す者は減つていった。

このころ、森の民たちは罪を犯す穢れた者のこと、「罪犯・レヴァン

」と呼ぶようになつたらしく。

しかし、生き残った罪犯たちは仲間を奪つた森の民へ復讐するため
に、「森狩り」を始めた。

森狩りとは、憎き森の民を滅ぼす、罪犯が始めた行いである。
森狩りによつて森の民の数は激減していつた。

「…そして今に至るわけだ。私の両親も森狩りによつて失つた
リアのこぶしが震えてる…」

「リ…」

ドオオオオオオオオオン！！

爆音！？

音のした方へ目を向けると…

「森が…！」

火事だ！

リアはすごい速さで走り、奥へ消えていった。

急いで追いかけると2人の男とリアが戦つていた。

「お前！聖光の森になにを！」

リアの怒声が聞こえてきた。

リアはおこつているみたいだ。

男Aの両手にはライターとガソリンを持つている。

あいつが火を放つたのか！

リアは男Bによつてこけている！

危ない！

考えるより早く手が動いていた。

あれ？剣先がなおつてる。

そういうや、さつきリアが磨いてたな。

鋭くなつた剣でリアを助けることに成功した。

ぼきも戦いに入つて形勢逆転。

あつというまに力タガついた。

「ミリファーー」

「ん？」

「ありがとう」

「どういたしまして」

「いや、恩は返さなければならぬ。お前に恩返しをしなければ」

「大丈夫だよ？」

「うーん…、そうだ、お前の仲間に入れてくれ。そうすればお前を守れる」

そんなこんなでリアが仲間に加わった！（ゲーム風）

「次はどこへ行こうか？」

「ここを少し歩いたとこに街がある。ここに行こう？」

「うん、よし、つぎの行き先は、『バルカの街』だ！」

バルカの女性

「//ココファー……」

誰かがぼくを呼んでいる。

君は……誰……？

「ミリファー！いくぞ！」

ぼくはリアの声で目が覚めた。

そうか……今、ぼくたちはバルカの街にいく途中なんだ。

ぼくは立ち上がる。

なんだらか、とても懐かしい夢を見ていたよつた気がしたんだけどな……。

でも、深く考えないようにしよう。

そうしてぼくは、歩き始めた。

バルカの街をめざして。

やつとだ……ついに……バルカの街に……

「ついた」

リアがあつたり言つ。ぼくの苦労を返せと一瞬言いたくなつた。
ぼくは深呼吸して言つた。

「とりあえず、食料を調達してから宿屋に行こうか。」

リアがあたりを見回してちよつと遠慮ぎみに言つた。

「でも……ミリファー、ここには宿屋が無いみたいだぞ？」

そつ言われてぼくも360度回転し、あたりをキョロキョロ見回した。

「ほんとだ……」

たしかに、ここには宿屋らしき建物がない。

「…………でも、食べ物はあるだろう。食べてから考えよつよ。リアもぼくの意見に賛成したみたいだ。小さく頷いた。

ぼくは、持つてゐるオリアでハンバーガーを3つ買つた。
ひとつはリアの、もうひとつはぼくの。

じゃあもう一つは？と思つてゐる方もいるだろ？

みんな忘れていいか？ぼくの相棒、トムのことさ。

2人と1匹が食べ終わるとイスに腰掛けて喋らうとしたが、その前にリアが

「それでは……どうする？」「コファー」

「ミリファー…………」「コファー！？」

ぼくのすぐ後ろにいた女性が叫んだ。

ぼくはびっくりしてふりかかる。

「あ・・すみません。あ…あの、あなたはコファーさんですか？」なぜぼくの名前を知つているのだ？と思ひながらも頷いた。

「ああ…やつぱり…………」「コファーさん、あなたの母から伝言を預かつてこます」

「…………？」

「…………ついてきて下せ。」

名も知らぬ女性は後ろを向いて歩きだした。

ぼくは言われるまま女性の後ろをついて行った。

母への手がかりがつかたような気がして嬉しい気持ちと、母は無事なのが不安な気持ちが混じりあって

ぼくは不思議な気持ちだつた。

トムは、そんなぼくの気持ちを察したよつに小さな声で短く鳴いた。

コノヨノナカハ

「くわ～ん……」

ぼくはトムの鳴き声でハツとする。

トムが、心配そうにこちらを見上げていた。

「大丈夫だよ。トム」

小声で言うと、トムはワン！と鳴いた。

「あの小屋に……」

女性は、そう言うと、小さな木造の家を指差し、入った。
ぼくらも、慌てて入る。

「まあ、すわって……話は、長いわ」

女性は、ルナと名乗つた。

「あなたは、見たところ……11歳つてどこかしら？」

ぼくを見て、言う。

確かに、ぼくは11歳だ。
こんどはリアを見て……

「この子は……15歳ぐらいだから、知ってるみたいね」
年齢がどうかしたのか？

「まず、この世界に住む者のコトについて」
大きな緑の瞳が、ぼくをまっすぐに見て言う。
「この世界には、5つの種族が存在するの……」

1つ目…『ヴァーラ族』

見た目：半人半獣。

人間に動物の耳、尾がついていると思えばいい。

（動物の種類は十人十色。猫、犬もあれば、ゴリラもいるらしい）

特徴：動物の耳と尾。

自分の耳と尾に成っている動物が得意とする技。
(例：猫だったら長い爪。蛇だったら毒など)

瞳の色：灰色・または黄色
森の民と仲が良かつたらしい。

2つ目：『クカツサ族』別名『森の民』
見た目：すらっとした身体。
美人が多い。

特徴：美男美女が殆ど。

瞳の色：緑や赤、青

3つ目：『エルヴァツカ族』
見た目：普通の人間

特徴：剣術・体術が得意。

瞳の色：茶、黒、赤

4つ目：『ザルヴァ族』

見た目：人魚。

クカツサ族に負けないくらいの美人が多い。

女性だつたらロングが殆ど。

特徴：泳ぎがメッチャ得意。

水中でもはつきり見える眼を持っている。

瞳の色：青

5つ目：『サントウ族』

見た目：絶対に金色の髪、白の瞳の人人が生まれてくる。

特徴：10年に一度、全ての種族の上に立ち、世界を統べる者として、サントウ族の中から一人だけ聖王カザカとして選ばれる日がある。

図でいうと

聖王カザカ > サントウ族 > 残りの4種族

「つて感じかしらね。」

リアつてクカツサ族だつたんだ…。

「これは、今の聖王カザカによつて14歳以上になつたら子供に話しなさいつて義務づけられているの」

あ…だから最初、年齢を聞いた（といづか予測）したんだ…。

「しかし、長かつたな。私はもつ森の民のおばば様に聞いたぞ」

「最初に長いつつたでしょ？文句はつけないわよ」

ルナが一呼吸おいて、言つた。

「つぎは…あなたのお母さんにについて…」

ぼくの体に緊張が走る。

ルナが口を開く。

「あなたのお母さん…」

コノヨノナカハ（後書き）

此処までやつとされました…

はあ…

がんばって、仕上げたいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6765u/>

ヴォルニカ物語

2011年12月27日19時49分発行